（１０）人権教育研究会

会　長　陸野　高俊（中筋小学校）
副会長　柴田　満嗣（下田小学校）
事務局　河野　通久（中村中学校）

１．研究主題

「人権教育における授業の創造」

２．研究経過

実施年月日	研究のあらまし	会場	備考
令和元年 ５月８日（水）	四万十市教育研究会組織総会 ・役員選出 ・研究主題設定 ・年間計画	中村南小学校	２５名参加
８月２０日（火）	人権教育研究会　夏季研修会 ○研修　「スポーツで上がる ADL・QOL」 （障害者理解について） 講師　高知県障害者スポーツセンター 永島　真子　さん ○情報交換	県立中村中学校 （第１会議室）	２１名参加
８月２３日（金）	指導案検討・教材研究会	中筋小学校	７名参加
１０月２日（水）	四万十市教育研究大会 ○授業者　八束小学校　岩井　圭　教頭 実施学年　第６学年 題材名　水平社宣言に学ぶ（同和問題）	八束小学校	２５名参加

３．活動内容

○　夏季研修会〔８月２０日（火）〕

研修：障害者理解について
演題：「スポーツで上がる ADL・QOL」
講師：高知県障害者スポーツセンター　　永島　真子　さん

・高知県立障害者スポーツセンターについての説明。
　老若男女、障がいの有無を問わず誰でも利用でき楽しむことのできる施設。スポーツ体験教室。
・永島さん自身の生い立ちについて。

・過去の日本の障害者に対する政策の遅れを知り、そこからの障害者を受け入れる体制づくりや障害者スポーツについて学ぶことができた。
・失われたものを数えず、残されたものを最大限に生かすイギリスの考え方。
・障害者スポーツの「何ができるか」という視点に立った考え方。
・日本ではまだまだ、障がいのある人に対して構えてしまう部分があるのではないか。
・障がいのある人や、障がいに関わることの重要性。
・人権教育を展開していくにあたり、まずは教員側が学ぶことで人権意識を高め、共通理解を持って児童生徒に伝えていける研修会にすることができた。

４．令和元年度四万十市教育研究大会
〔研究授業について〕

授業者：八束小学校　岩井　圭　教頭 題材名：水平社宣言に学ぶ（同和問題）

（１）授業者より

・社会科のなかで宣言文と出会うが、解放令が出たにもかかわらずなお差別がある現状を子どもたちが知る機会になる。水平社宣言をピックアップすることによって、西光万吉の視点を取り入れることも大切にしたかった。
・学習した歴史のことを自分ごととして考えられるまでには至っていない。
・出てきた児童の意見を黒板に書くのみになってしまい、共有化できなかった。
・「熱」と「光」が中心であったが、自分自身の生活に落とし込む部分については、次時に行う予定である。
・おさえるべき部分については、まとめに書くことができた。
・教師側が出すぎないように、子どもたちの意見から授業の展開に努めた。
・部落の人たちが受けてきた差別については、いろいろな場面について伝えてきた。
　→「解放令は必要だったか」の投げかけ→各身分の人々にとってマイナス面もあった。

（２）参観者より

・西光さんの思いを実現させるための集団運動の部分をつかませ、価値の高い授業になった。
・水平社宣言に時間をかけて（６時間）学習することで、子どもたちの理解も深まるのではないか。（山田少年等、人との出会い）
・先生側の言葉や問いかけが丁寧で、内容は難しかったが、子どもたちが自分の言葉で表現し伝え合っていた。
・社会科の中でも一時間丸ごと差別のことについて学習する機会はあまりない。こういう時間も必要で、生徒たちの中に落とし込んでいかなければならない。
・「人間を尊重すること」から「光」、「熱」につながり生きてくる。
・教師側の思いを出しすぎずに少し引きながら、子ども達の意見を肯定的に引き出していた。次時につながる。
・子どもは自分の言葉で考えを表現できていたので、子ども自身に黒板に書かせる場面があっても良いのではないか。
・人権学習の時間をどのように確保しているか。→　各学校から
・授業の前半部分をコンパクトにし、後半に時間を使うことで更に充実したものになったかもしれない。

・部落差別の核心をついた学習があまり見られないなかで、久しぶりに同和問題の核心に迫る授業を見た。児童の感性の鋭さに驚かされた。

（３）助言者（会長）より

「人間に光あれ」という文言から、「人と人との間に光あれ」ということが児童の意見から出てきた。正に人間（じんかん）に光ということを子どもたちは感じ取っているのではないだろうか。教員側の思いを抑え、児童がよく考え自分たちの言葉で表現しようとしていたことから、児童の言葉を前面に使った「まとめ」にすれば更に良かったように思う。小学校段階で中学校に上がるまでに学んでおくべき同和問題について確認しておく必要性を感じた。

５．今年度の成果と課題

２０２０年の東京オリンピック、パラリンピックを控え、「障害者スポーツ」という言葉や選手も身近になってきたが、実際に自身がそのスポーツに携わり、現在も関りを持つ活動を行っている講師との出会い、生の声を聞くことで障害者に対する意識や考え方、また、関わり方をよりリアルに考えさせられた研修となった。

研究授業においては、まずは指導案検討の中で子どもに何を学ばせ考えさせたいのか、何に気づかせどのような力を付けたいのかという視点から授業を構築することで、教師側の知識理解を深め、人権感覚の向上に繋がるものとなったように感じる。

課題としては、人権学習の確保、そして各教科の授業の中でどのように人権課題と向き合わせ、子ども達の人権感覚の向上に繋げていくかという部分と、自分ごととしてとらえ考えさせるということである。また、地域内の学校間、小中学校間の連携をより密にすることで、学習内容の温度差をなくし、段階に応じて更に発展させた学びに繋げていくことも必要である。